

日本古代史ネットワーク・解明委員会第6回

「古事記・日本書紀の成り立ちとその違い」 及び 「一書と 天孫族・出雲族の系図」

Ver.2021.5.13

2021年5月22日(土)
丸地 三郎



今回のテーマについて

- 日本古代史ネットワークの取り組む重点テーマとして「日本書紀・古事記・風土記の世界」を取り上げた意図は、
 - 古墳時代以前は、“神話の時代”と云われ、その時代に関しては、『文献史料』が、使われていない。
 - その時代に関しては、『考古学史料』と『中国文献史料』のみが使われている。
 - 教科書も専門書も、『文献史料』が使われておらず、扱っている例が少ない。
- ✓ 貴重な歴史遺産である日本書紀・古事記・風土記などの『文献史料』を見直し、その外の史料と照らし合わせて、歴史を構築する重要な材料として使うことを検討しよう！
- その中で、今回は、文献史料全般を取り扱うのではなく、特定のテーマに絞ります。
 - 特定のテーマ
 - ◆ 一書： 日本書紀にある一書の取り扱いと概要 その意味合い
 - ◆ 素戔鳴尊の子孫： 日本書紀の本文の記述では、スサノオと大国主命は親子関係
古事記では、スサノオの六代目の子孫が大国主命で、多くの子孫の名前が挙げられている。
日本書紀の一書には、親子関係とせず、古事記と同様の記述が複数存在
- ✓ 古代史を文献史料を使って構築する場合の試金石となるテーマである。
 - 史料批判を行い、素戔鳴尊と大国主の系図上の関係について、日本書紀本文の記述と古事記の記述のどちらか信頼性が高いのか。検討する。
 - 文献史料とその他の史料の対比を試みる。
- 史料批判を行うに先立ち、記紀の簡単な紹介と比較を、多くの記紀に関する概説書から抜粋して行い、
 - 日本書紀の本文と一書の紹介と本文・一書の違いを検討する。
 - 素戔鳴尊と大国主の関係について、日本書紀の取り扱いを図示する。

古事記と日本書紀

- 天武天皇が古事記編纂の指示した。晩年に日本書紀の編纂の命令も行ったと云われる。
- 完成時期は、古事記712年/日本書紀720年。
- 記載の最終時期は古事記:推古天皇 日本書紀:持統天皇
- 両書とも、漢文で記述されている。
 - 日本書紀は、唐から習得した最新の漢文で記述。
 - 古事記は、倭人が中国に居た時代の漢文で記述。人名・地名・歌(和歌)など日本語独自の発音を伝えるため、カナのように発音に応じた特定の漢字をあてはめた上代特殊仮名遣を創出した。

- 神代(神武東征以前)の話
 - 古事記では、全3巻の内1巻
 - 日本書紀では、30巻の内2巻
- 評価
 - 古事記:日本国内向け・天皇家の歴史書
 - 日本書紀:中国を意識した外国向け正規の日本史書
- 古事記・日本書紀の原典
 - 大化の改新で、天皇記などが消失。国記も現存せず、
 - 帝紀・本辭(旧辞)なども散逸。
 - 原典との照合は望めないため、別の検証方法が望まれる。

古事記 記載時期

日本書紀 記載時期

用明	崇峻	推古	舒明	皇極	孝徳	斉明	天智	弘文	天武	持統	文武	元明	元正	聖武	
		593	645	645	645	645	645	671	672	686	697	707	715	724	
		遣唐使													
		遣隋使	大化の改新												
			白村江の戦い												
			壬申の乱												
			藤原京へ遷都												
			平城京へ遷都												

古事記・日本書紀 編纂指示

完成 712

完成 720年

古事記と日本書紀 神代の記述内容の大きな差異

- 内容的に大きな差異がある所を挙げる。
 - 序文の有無：
 - 古事記、続日本紀、日本後紀、続日本後紀など、歴史書には、序文などがあり、誰が記し、いつ献上したかが記載されている。
 - 日本書紀だけには序文が無い。著者、完成時期は推し諮られたもの。
 - 古事記に書かれていて、日本書紀に書かれていない、神代のことが多い。
 - 古事記には出雲神話と呼ばれる因幡の白兔、八十神の八上姫求婚の旅、八十神の迫害、根の国訪問と須勢理毘売命、沼河比売求婚 など子供達にも語り継がれる話が有るが、日本書紀には記載が無い。
 - 出雲の国譲りの場面には、建御名方神が、日本書紀では登場しない。
- 注目する大きな差は
 - 古事記では、須佐之男命(スサノオ)の子孫が沢山記述され、
 - 大国主命は6代目の子孫
 - 6代に至る系図が詳細に記述される。又、主要な子孫:大年の子孫25名も記載。
 - 大国主の子孫も、9代が、婚姻相手とその親を含め、詳細に記載。
 - 日本書紀では、素戔嗚尊(スサノオ)の息子が大国主命と記載。
 - 出雲系の子孫の記載は少ない。
- ✓ 古代史の解釈・解明に大きく関わる『素戔嗚尊から大国主の系譜』の違いを焦点にあて、以下、論を述べることにする。

日本書紀

- 神代から持統天皇の時代までを扱い、漢文・編年体で記述。全30巻。系図1巻が付属したが失われた。
- 『古事記』は序文に編纂の経緯の説明があるが、『日本書紀』には序文・上表文が無く編纂の経緯の記述はないため、いつ成立したのかわからない。『続日本紀』の記述から成立を推測。
- 日本書紀30巻の内、神代上下2巻は、人物・逸話を中心に書いた紀伝体で書かれ、それ以降の28巻は、出来事を年代順に記す編年体で書かれた。
- 日本書紀には、本文とは異なる説を一書(あるふみ)として複数記載されている。
 - 神代では、一書の割合がはなはだしく多く、読みづらい文章になっている。
 - 又、一書を抜いて、本文だけを読むと、話が繋がらず、読みづらい。
- 原典
 - 天武天皇・持統天皇の記録は、細かい年毎の記録がある。これは政府記録が利用できたことによる。
 - 天智天皇より前の記録は、年毎の記録密度が疎であるが、これは壬申の乱でそれ以前の政府記録が失われたことによると推定される。
 - 坂本太郎(歴史学者)は『日本書紀』中の地名説話や地方の物語の存在から、地方の伝承も採録されたと推測している。
 - 持統天皇5年(691年)に十八氏に先祖の墓記を提出させたことが記録に残されており、諸氏に伝えられた先祖の記録が用いられた可能性が有る。
 - 原典が壬申の乱で消失し、多様な記録を集めて、天武天皇より前の記述をしたものと推測される。信憑性には難が有る。
 - 古事記に関しては「稗田阿礼」が稗田阿礼が「誦習」していた「帝紀」「旧辞」を太安万侶が記述したと序文に有る。古代の語り部として、世襲で歴史を伝える専門職の頭脳に保存された「帝紀」「旧辞」が写し取られたものと考え、伝承としては高い信憑性があると判断する。
 - 町田市の香山園の神倉家当主に家伝の記憶の仕方を尋ねた所、漢文を漢字の形を覚え、暗唱して伝承し、漢字一つ一つを誤りなく伝承してきたとのこと。(2014/5丸地)
- 9巻は、天皇とはされていない神功皇后に1巻全体を与え、28巻は、壬申の乱の記述に全体を費やしている。

『日本書紀』卷第一神代上の「一書」の数(一書曰 43、一書云 4)

『日本書紀』卷第二神代下の「一書」の数(一書曰 16)

上下巻総合計・・・・・・・・・・・・・・・・・・73か所

	合計	本文	一書	本文	一書
神代上	13,546	3,332	10,214	25%	75%
神代下	12,361	3,224	9,137	26%	74%
計	25,907	6,556	19,351	25%	75%

此
總
定
例

日本書紀
神代上
黒字＝本文
青地＝一書

日本書紀 本文と一書 (日本神話.com 『日本書紀』の「一書」とは より引用)

巻	巻 第一								巻 第二			巻第三	巻 第四
	神代 上								神代 下				
段	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	—	—
テーマ	天地開闢 純男三神	耦生八神	神世七代	天降り 結婚と 国産み	神生み 三子誕生 分治	謀反嫌疑 誓約 子生み	勝さび 石窟幽居 神事	出雲降り 大蛇退治 国造り	国の平定 天孫降臨 結婚出産	幸換え 海宮訪問 結婚出産	四男神	東征建国	綏靖～開化天皇
本伝	本伝	本伝	本伝	本伝	本伝	本伝	本伝	本伝	本伝	本伝	本伝		
一書 (異伝)	書1	書1	書1	書1	書1	書1	書1	書1	書1	書1	書1		
	書2	書2		書2	書2	書2	書2	書2	書2	書2	書2		
	書3			書3	書3	書3	書3	書3	書3	書3	書3		
	書4			書4	書4			書4	書4	書4	書4		
	書5			書5	書5			書5	書5				
	書6			書6	書6			書6	書6				
				書7	書7				書7				
				書8	書8								
				書9	書9								
				書10	書10								
					書11								
時代	神話の時代												
												歴史の時代	

日本書紀 本文

(日本神話.com 『日本書紀』の「一書」とは より引用)

- 『日本書紀』神代 合計25,907文字(本文 6,556文字、一書 19,351文字)
 - 微妙に異なる一連の「一書」は「本文」の丁度3倍もあり。
 - 『古事記』の神代は18,330文字もあり、特に大国主神の話も面白く、最近では神社のパワースポット・ブームも手伝って『古事記』の解説本を書いて日本神話を紹介する人が多い。当然『日本書紀』の方は誰も見向きもしない羽目になる。
- 『日本書紀』巻第一、第二(神代紀)のポイント
 - [一書]は、「日本書紀」巻第一、第二、という「神代紀」に限定されている
 - 「一書」は、体系性、統一性、系統性をもっている
- 本伝の内容を踏まえないと「一書」は読めないようになっている。
 - 逆に、一書の内容を踏まえないと後続の本伝は読めないようになっている。
 - そんな時に登場するのが、先行する[一書]
 - ✓ 本文だけでは、読めないようになっていることになる。 ←注意

本伝だけ読んでみると、「え？ 何！ この高天原、どこで出てきたん??？」ってなる。でも、第一段の一書第4、そして、第五段の一書第6を読んでおけば、「あ、前に出てきた例のアレね(納得)」ってなる。

- 本文5段では、『天照大神』が誕生し、早く[天に送って](#)、授くるに[天上の事](#)を以てすべし。
- 5段の一書第6は長文。古事記の伊弉冉の死・黄泉の国・帰還・天照/月読/素戔鳴尊誕生が入る
- 本文に「高天原」が出てくるのは、第6段。(突然)「高天原」の名称が出る。
 - 「素戔鳴尊」が天照大神の居る高天原に向かおうとする場面で初めて高天原が出てくる。
- 1段一書第4は、
高天原で生れた神の名は、
天御中主尊と云う。

本文だけを読むと、読み難い
所が出てくる。

中国を念頭に置いた対外的史書とするならば、本文では、外国人には理解されず、目的に合わない。

本文では、『天照大神』とは記さない。大日靈貴(おおひるめのむち)記す。一書に天照大神とある。やはり、外国人には、対応が付かず理解できない。

巻	巻 第一								巻 第二			巻第三	巻 第四
	神代 上								神代 下				
段	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	—	—
テーマ	天地開闢 純男三神	耦生八神	神世七代	天降り 結婚と 国産み	神生み 三子誕生 分治	謀反嫌疑 誓約 子生み	勝さび 石窟幽居 神事	出雲降り 大蛇退治 国造り	国の平定 天孫降臨 結婚出産	幸換え 海宮訪問 結婚出産	四男神	東征建国	綏靖～開化天皇
本伝	本伝	本伝	本伝	本伝	本伝	本伝	本伝	本伝	本伝	本伝	本伝		
一書 (異伝)	書1	書1	書1	書1	書1	書1	書1	書1	書1	書1	書1		
	書2	書2		書2	書2	書2	書2	書2	書2	書2	書2		
	書3			書3	書3	書3	書3	書3	書3	書3	書3		
	書4			書4	書4			書4	書4	書4	書4		
	書5			書5	書5			書5	書5				
	書6			書6	書6			書6	書6				
				書7	書7				書7				
				書8	書8								
				書9	書9								
				書10	書10								
					書11								
時代	神話の時代												
												歴史の時代	

日本書紀は、対中国向けに利用されたのか？

- 『新唐書』(しんとうじょ)は、中国の唐代の正史で、西暦1060年成立した。
 - 新唐書には、倭についての記述が有り、初代の王は天御中主としている。

『新唐書』	『古事記』
日本のルーツは「倭の奴」	神々のルーツは「高天原」
天御中主は初主(初代の王)	天御中主神は初代の神
天御中主から神武まで32世	天御中主神からイザナギまでの神々の系譜 (及び天照大神から神武天皇までの系譜)
(この間に卑弥呼)	(イザナミから天照大神)
神武まで筑紫城(九州)	神武まで筑紫・日向
神武東遷→九州から大和へ	神武東遷→九州から大和へ

季刊「古代史ネット」掲載
奴国の時代①河村哲夫著
より

- 天御中主は日本書紀本文には記載なし。一書の4に記載は有るが初代との記述無し。
- 『宋史』(そうし)は、中国の元代の正史で、1345年完成
 - 宋史の日本に関する記述では、
 - 日本国は本(もと)の倭奴国なり。
 - 初めの主は天御中主と号す。次は天村雲尊といい、その後は尊を以て号となす。
 - 上記の新唐書と同様に、日本書紀以外の情報が伝わっているものと考えられる。
- 古事記ベースの情報が中国の唐に伝わっていたことが判る。
- 日本書紀は、対中国をし意識した正史と云われるが、上記の2例を見ても、実際には使用されなかった、又は、中国側に認められなかったと言える。

古事記と日本書紀・本文・一書 人物・系図の違い

- 解明委員会の可児 俊信さんに、古事記と日本書紀・本文・一書 人物・系図の違いを整理して頂き、Excelに記された表として、ご提示頂いたものを、まとめ直したものを示します。
 - 天地開闢
 - 国生み
 - 神生み
 - イザナミ(薨去)
 - カグツチ
 - イザナキの禊
 - 誓約
 - スサノオ→オオクニヌシ
 - オオトシ
 - オオクニヌシ

天地開闢

古事記	日本書紀	日本書紀①	日本書紀②	日本書紀③	日本書紀④	日本書紀⑤	日本書紀⑥
天之御中主	国常立 くにのとこたち	国常立くにのとこたち 国底立くにのそこたち	可美葦牙彦舅 うましあしかびひこじ	可美葦牙彦舅 うましあしかびひこじ	国常立 くにのとこたち	国常立 くにのとこたち	天常立 あめのとこたち
高御産巢日	国狭槌 くにのさつち	国狭槌くにさつち 国狭立くにのさたち	国常立 くにのとこたち	国底立 くにのそこたち	国狭槌 くにのさつち		可美葦牙彦舅 うましあしかびひこじ
神産巢日	豊斟渟 とよくむめ	豊国主とよくにぬし 豊組野とよくむの 豊香節野とよかぶの 浮経野豊買 うかぶののとよかう 豊国野とよくにの 豊齧野とよかぶの 葉木国野はこくにの 見野みの	国狭槌 くにさつち		天御中主		国常立
宇摩志阿斯訶備比古遲 うましあしかびひこじ					高御産巢日 たかみむすひ		
天之常立 あめのとこたち					神皇産靈 かみむすび		
国之常立 くにのとこたち							
豊雲野 とよくもの		日本書紀の番号は異伝（一書曰）の号数					
宇比地邇 うひでに	須比智邇 すひちに	泥土煮 ういじに	沙土煮尊 すいじに	天鏡 あまのかがみ			
角杵 つのぐひ	活杵 いくぐひ	大戸之道 おおとのじ	大苦辺尊 おおとまべ	天万 あまのよろず			
意富斗能地 おほぼくのち	大斗乃辨 おほぼくのべ	面足 おもだる	惶根 かしこね	沫蕩 あわなぎ			
於母蛇流 おもだる	阿夜詞志古泥 あやかしこね	伊弉諾 いそだ	伊弉冉 いそに	伊弉諾			
伊邪那岐	伊邪那美						

国生み

古事記	日本書紀	日本書紀①	日本書紀⑥	日本書紀⑦	日本書紀⑧	日本書紀⑨	日本書紀⑩
伊邪那岐 伊邪那美	伊弉諾 伊弉冉	伊弉諾 伊弉冉	伊弉諾 伊弉冉	伊弉諾 伊弉冉	伊弉諾 伊弉冉	伊弉諾 伊弉冉	伊弉諾 伊弉冉
水姪子	淡路洲	蛭児	淡路洲	淡路洲	磯敷慮島	淡路洲	淡路洲
淡島 あわしま	大日本豊秋津洲 おおやまとよあきつしま	淡洲	大日本豊秋津洲	大日本豊秋津洲	淡路洲	大日本豊秋津洲	蛭児
淡路之穂之狭別島 あわじのほのさわけのしま	伊予二名洲 いよのふたなのしま	淡路洲	伊予洲	伊予二名洲	大日本豊秋津洲	淡洲	
伊予之二名島 いよのふたなのしま 愛比売、飯依比古、大宜都比売、建依別	筑紫洲	大日本豊秋津洲	筑紫洲	億岐洲	伊予二名洲	伊予二名洲	
筑紫島ちくしのしま 白日別しるひわけ、晝日別とよひわけ、 建日向日豊久土比泥別たけひむかひと よくしひねわけ、建日別	億岐洲 おきのしま	伊予二名洲	億岐洲	佐度洲	筑紫洲	億岐三子洲	
吉岐島 天比登都柱 あめひとつばしら	佐度洲	筑紫洲	佐度洲	筑紫洲	吉備子洲	佐度洲	
対馬 天之狭手依比売 あめのさてよりひめ	越洲 こしのしま	億岐三子洲	越洲	吉岐州	億岐洲	筑紫洲	
佐渡島 天御虚空豊秋津根別 あまつみそらとよあきつねわけ	大洲 おおしま	佐度洲	大洲	对馬州	佐度洲	吉備子洲	
吉備児島さびのこしま 建日方別たけひかたわけ	吉備子洲 さびのこしま	越洲	子洲こしま		越洲	大洲	
小豆島 大野手比売おほのでひめ		吉備子洲					
大島 太多麻流別おほたまるわけ							
女島めじま 天一根あめひとつね							
知訶島ちかしま(五島列島) 天之忍男あめのおしお							
両児島 ふたごのしま(男女群島) 天両屋あめふたや							

[illegible]

イザナミ(薨去)

古事記	日本書紀③	日本書紀④
伊邪那美 金山毘古 かなやまびこ 波邇夜須毘古 はにやすびこ 弥都波能売 みつはのめ 和久産巢日 わくむすひ 金山毘売 かなやまびめ 波邇夜須毘売 はにやすびめ 豊宇気毘売 とようけびめ	伊奘冉 ミツハノ女 埴山姫 天吉葛	伊奘冉 金山彦 ミツハノ女 埴山姫

カグツチ

古事記			日本書紀⑥			日本書紀⑦		日本書紀⑧
伊邪那岐の涙	火之迦具土の血	火之迦具土の体	火之迦具土の血			火之迦具土の体	火之迦具土の血	火之迦具土の体
泣沢女 なきさわめ	石折 いわさく	正鹿山津見 まさかやまつみ	啼澤女命 なきさわめ	甕速日 みかはやひ	闇竈 くらおかみ	雷 いかずち	磐裂神 いわさく	大山祇 おおやまつみ
	根折 ねさく	淤藤山津見 おどやまつみ		燐速日 ひのはやひ	闇山祇 くらやまつみ	大山祇 おおやまつみ	根裂神	中山祇 なかやまつみ
	石筒之男 いわつつのお	奥山津見 おくやまつみ		武甕槌 たけみかづち	闇罔象 くらみつは	高鼈 たかおかみ	磐筒男神 いわつつお	麓山祇 はやまつみ
	甕速日 みかはやひ	闇山津見 くらやまつみ		岩裂神 いわさくのかみ	級長戸辺命 しなとべ 級長津彦命しなつひ		磐筒女神 いわつつめ	正勝山祇 まさかやまつみ
	槌速日 ひはやひ	志芸山津見 しぎやまつみ		根裂神 ねさくのかみ			経津主神 ふつぬし	雑山祇 しぎやまつみ
	武御雷之男 たけみかづちのお 速布都たけふつ 豊布都とよふつ	羽山津見 はやまつみ		磐筒男神 いわつつお				
	闇淤加美 くらおかみ	原山津見 はらやまつみ		磐筒女命 いわつつめ				
	闇御津羽 くらみつは	戸山津見 とやまつみ						

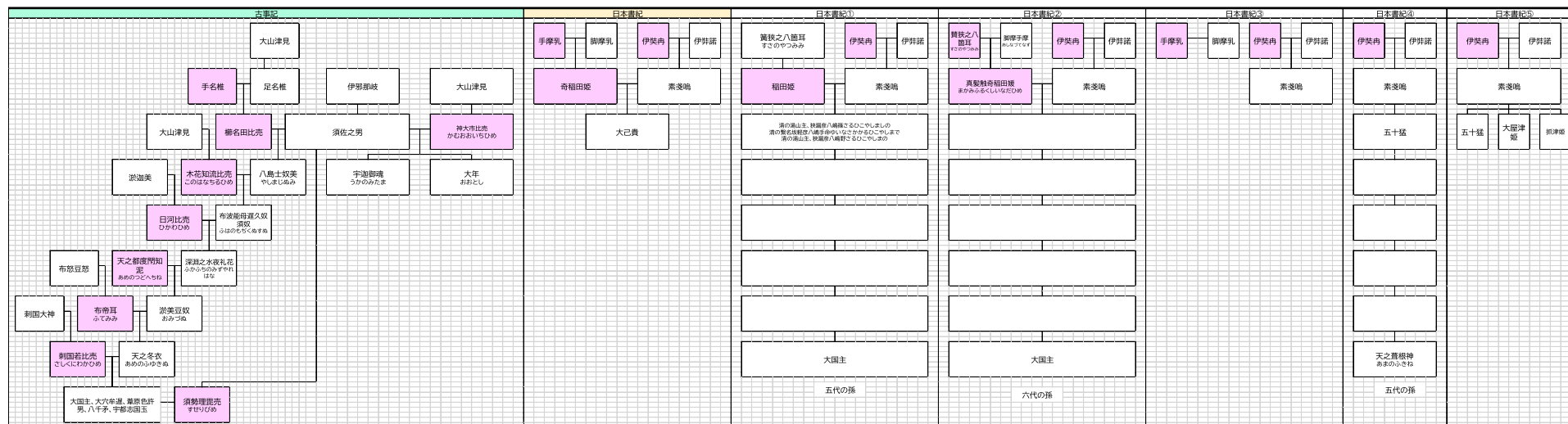
イザナキの禊

古事記				日本書紀 ^⑩
伊邪那岐				伊弉諾
衝立船戸 つきたつふなと	八十禍津日 やそまがつひ	底津綿津見 そこつわたつみ	天照大御神	磐土 いわつち
道之長乳齒 みちのながちは	大禍津日 おおまがつひ	底筒之男そこつ つのお	月読	大直日 おおなおひ
時量師 ときはかし	神直毘 かむなおび	中津綿津見 なかつわたつみ	須佐之男	底土 そこつつ
和豆良比能宇斯能 わづらひのうしの	大直毘 おおなおび	中筒之男なかつ つのお		大綾津日 おおあやつひ
道俣ちまた	伊豆能売 いずのめ	上津綿津見 うわつわたつみ		赤土 あかつち
飽咋之宇斯能 あきぐいのうしの		上筒之男 うわつつのお		
奥疎 おきざかる				
奥津那芸佐毘古 おきつなぎさびこ				
奥津甲斐弁羅 おきつかいべら				
辺疎へざかる				
辺津那芸佐毘古 へつなぎさびこ				
辺津甲斐弁羅 へつかいべら				

誓約

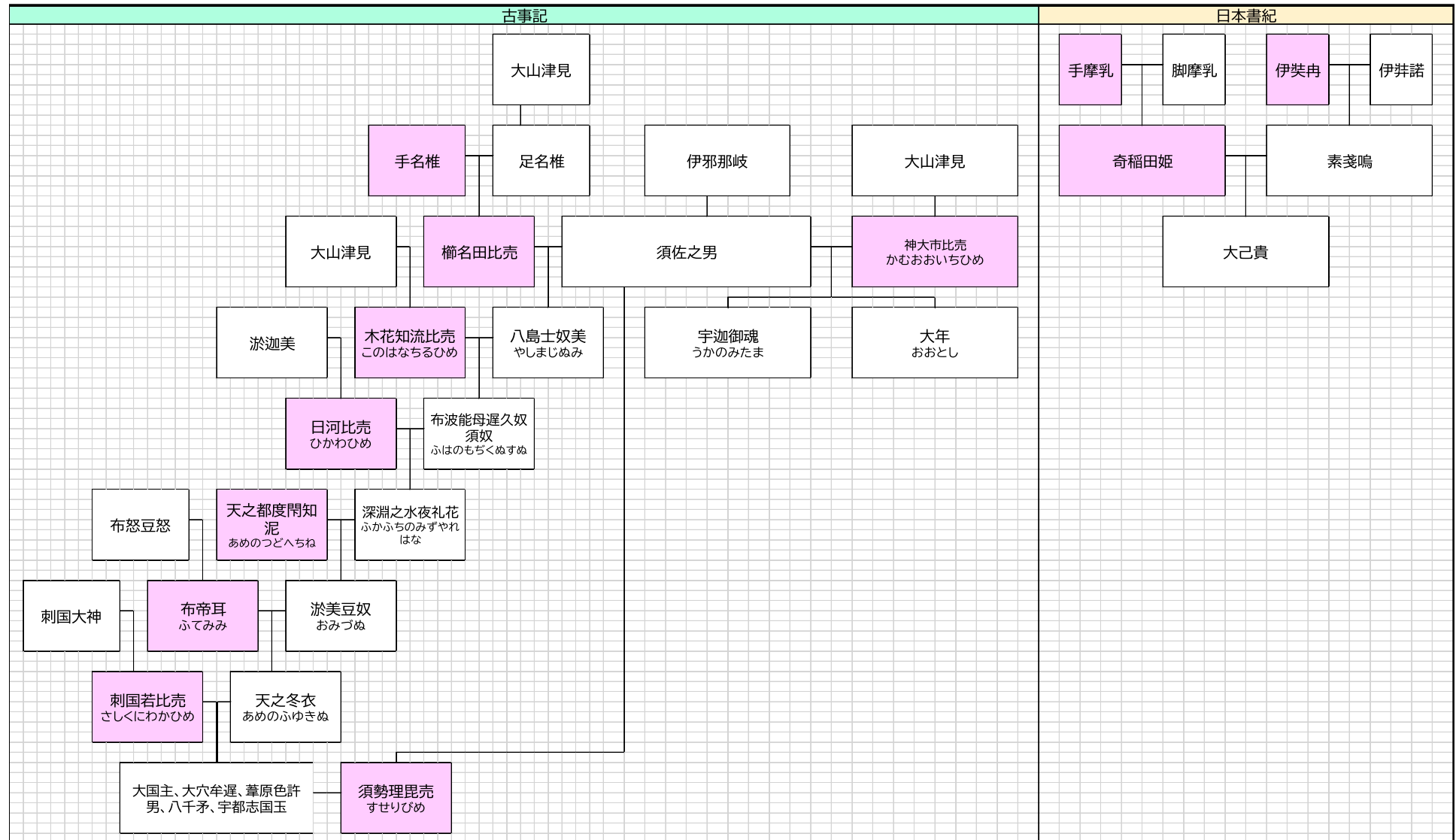
古事記	日本書紀	日本書紀①	日本書紀②	日本書紀③
須佐之男	素戔嗚	素戔嗚	素戔嗚	素戔嗚
多紀理毘売 たきりびめ 沖津島比売 おきつしまひめ	田心姫 たこりひめ	正哉吾勝勝速日 天忍骨 まさかあかつかは はやひのあまのお	市杵島姫 いつしまひめ	勝速日天忍穗耳 かははやひあまの おしほみ
市杵島比売 いちしまひめ 狭依毘売 さよりひめ	湍津姫 たぎつひめ	天津彦根 あまつひこね	田心姫 たこりひめ	天穗日 あめのほひ
多岐都比売 たきつひめ	市杵嶋姫 いつしまのひめ	活津彦根 いくつひこね	湍津姫 たぎつひめ	天津彦根 あまつひこね
天照大御神	天照大神	天穗日 あまのほひ	天照大神	活津彦根 いくつひこね
正勝吾勝勝速日 天之忍穗耳 まさかあかつかは はやひあめのおしほ み	正哉吾勝勝速日 天忍穗耳 まさかあかつかは はやひあまのおしほ み	熊野忍踏 くまのおしほみ	天穗日 あまのほひ	烽之速日 ひのはやひ
天之菩卑 あめのほひ	天穗日 あめのほひ	日神	正哉吾勝勝速日天 忍骨 まさかあかつかは はやひのあまのおしほ	熊野忍踏 くまのおしほみ 熊野忍隅 くまのおしくま
天津日子根 あまつひこね	天津彦根 あまつひこね	瀛津嶋姫 おきつしまひめ	天津彦根 あまつひこね	日神
活津日子根 いくつひこね	活津彦根 いくつひこね	湍津姫 たぎつひめ	活津彦根 いくつひこね	瀛津島姫 おきつしまひめ 市杵嶋姫 いつしまひめ
熊野久須毘 くまのくすび	熊野櫛樟日 くまのくすび	田心姫 たこりひめ	熊野櫛樟日 くまのくすび	湍津姫 たぎつひめ
				田霧姫 たぎりひめ

スサノオ→オオクニヌシ ①全体

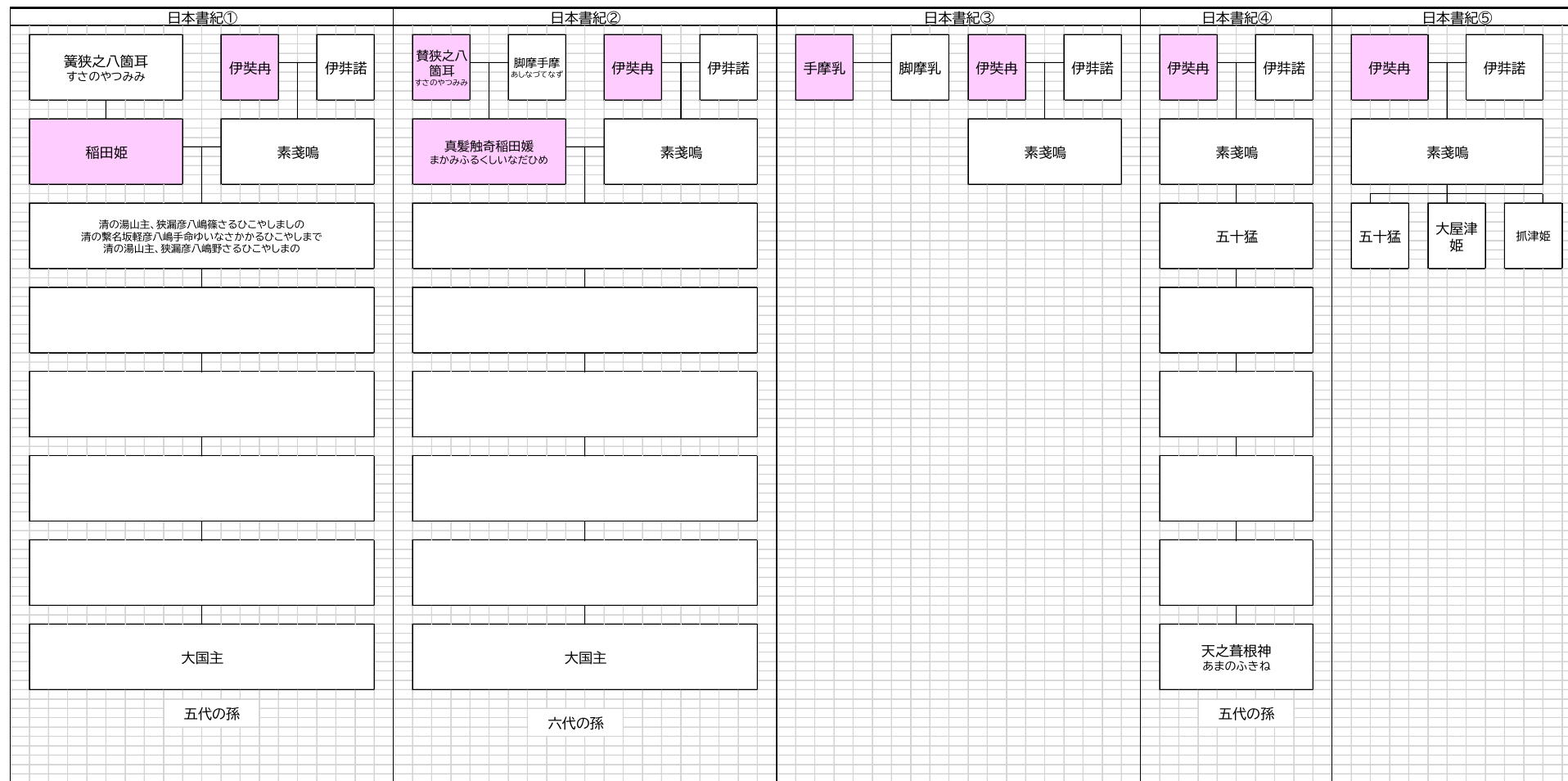


素戔嗚尊の息子の狭漏彦八嶋篠(別名2つあり)の五代の子孫の意

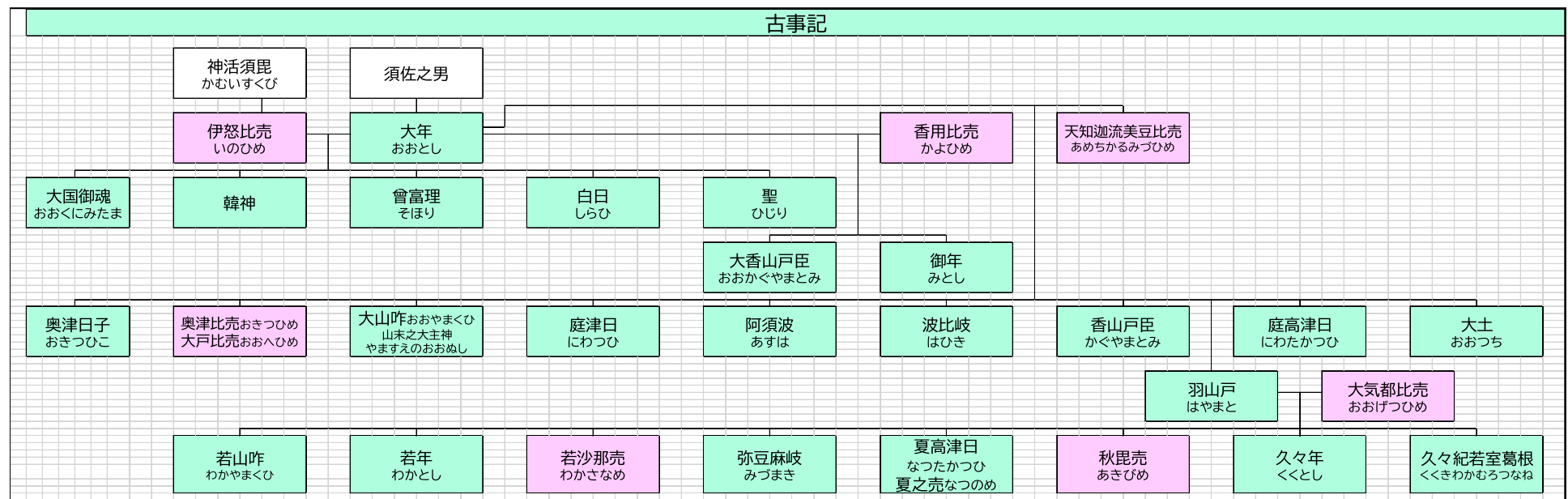
スサノオ→オオクニヌシ ② 古事記と日本書紀の本文



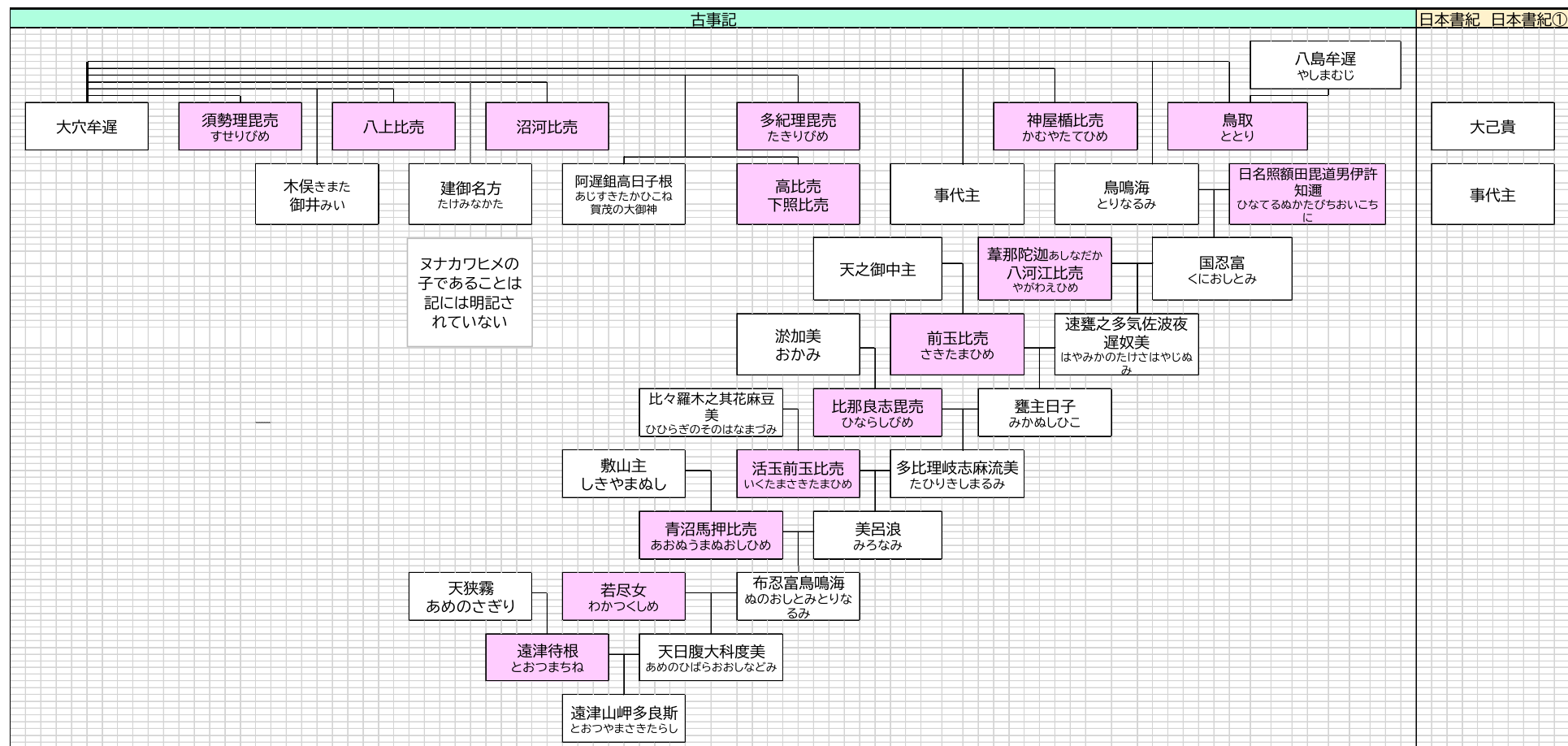
スサノオ→オオクニヌシ ③ 日本書紀の一書



オオトシ



オオクニヌシ



天孫族・出雲族の系図の記紀の差異

古事記

①	②	③	④	⑤					⑥
天照大神	天忍穗耳命	邇邇藝命	火遠理命(山幸彦)	鵜葺草葺不合命					神倭伊波礼毘古命 神日本磐余彦尊 (神武天皇)
須佐之男命	八島奴美神	布波能母遲久奴須奴神	深淵之水礼花神	淤美豆奴神	天冬衣神	大国主命	事代主		伊須氣 余理比売
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧		⑨

日本書紀(本文)

①	②	③	④	⑤	⑥
天照大神	天忍穗耳命 天忍穗耳尊	邇邇藝命 瓊瓊杵尊	火遠理命 (山幸彦) 彦火火出見尊	鵜葺草葺不合命 鵜草葺不合尊	神倭伊波礼毘古命 神日本磐余彦尊 (神武天皇)
須佐之男命 素戔嗚尊	大国主命			事代主	伊須氣 余理比売
①	②			③	④

日本書紀第8段 (大国主の親について)

- 第8段
 - 本文：素戔嗚尊は、八岐大蛇退治の後、奇稻田姫と結婚し、大己貴命が生れた。
 - 一書(第一)：素戔嗚尊 子：清の湯山主 此神**五世孫**、即大國主神
 - 一書(第二)：素戔嗚尊 **六世孫**、是曰大己貴命
 - 一書(第三)：
 - 一書(第四)：素戔嗚尊 其子**五十猛神** 五世孫天之葺根神
 - 一書(第五)：素戔嗚尊之子、號曰**五十猛命**。妹大屋津姫命、次栴津姫命、凡此三神、亦能分布木種、即奉渡於紀伊國也。
 - 一書(第六)：大國主神 少彥名命 大三輪之神：此神之子、即甘茂君等・大三輪君等・又姫蹈鞬五十鈴姫命。是爲 神日本磐余彥火火出見天皇之后也。
- 本文では、古事記を否定して、大己貴命＝大国主命が素戔嗚尊の子だとしたが、
 - 第一/第二の一書では、本文を否定し五世孫/六世孫が大国主命とした。
 - 第四/第五の一書では、直接否定はしないが、素戔男尊の子の五十猛神の活躍と子孫を示す。
 - 第六の一書では、古事記に書かれた大国主の記述と類似の、少彥名命の話などを長々と引用。
- **先行する古事記の記述を否定して本文を記するが、その本文を否定する一書を複数並べる。この歴史の記述方法自体が、歴史書としての完成度、本気度が疑われる。**
 - 歴史家が自分の責任で記したものならば、別の少数の可能性を示すことが有ったとしても、一つの物語(記述)を示すべき。
 - 相互否定する複数の物語(記述)をただ並べ立てる記述は、歴史家の「誇り」も感じられない、「みっともない」記述と云える。

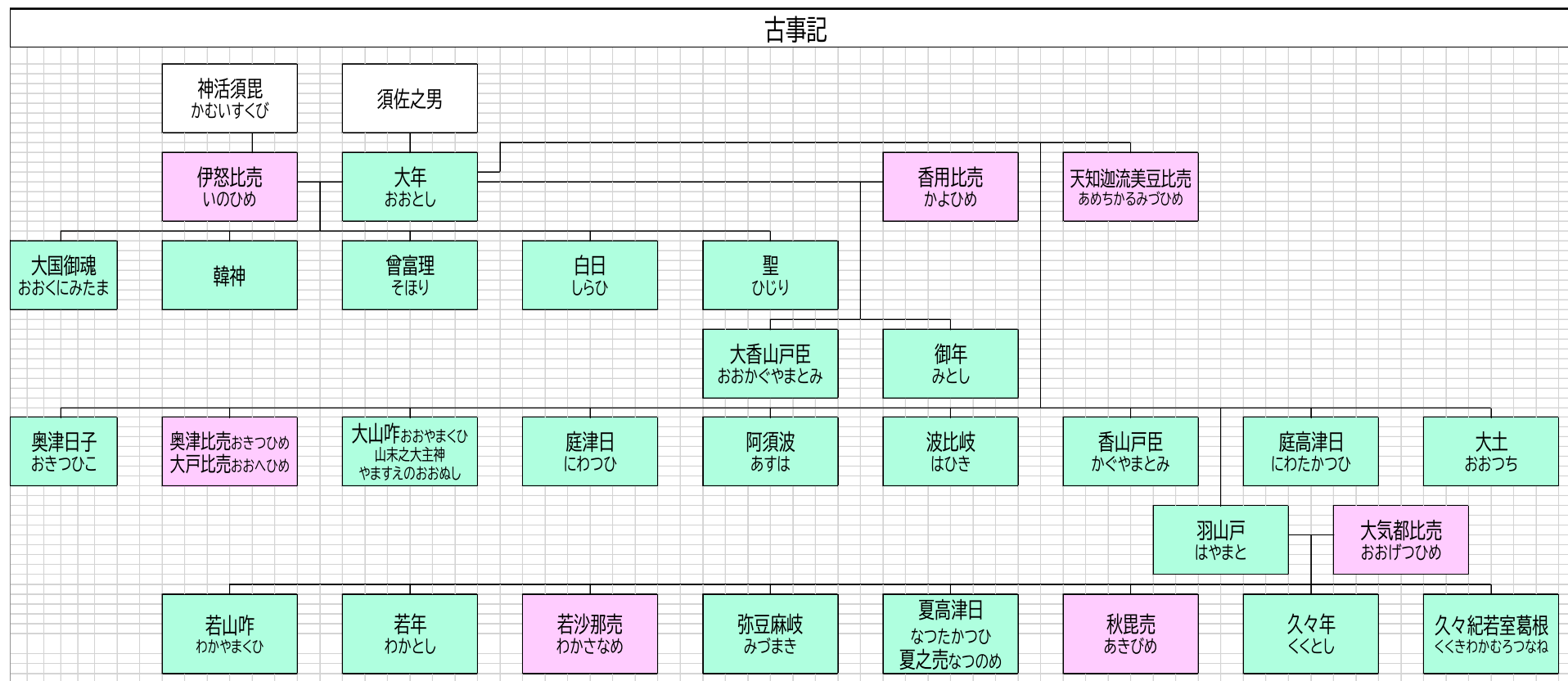
日本書紀本文が否定したもの

- 第8段本文:素戔鳴尊は奇稻田姫と結婚し、大己貴命を生れた。
 - この文章によって否定されたものは下記の古事記の記述

「古事記に記された出雲神話と出雲一族の系譜」

- 八島土奴美神(やしまじぬみのかみ)-布波能母遲久奴須奴神(ふはのもぢくぬすぬのかみ)-深淵之水夜礼花神(ふかぶちのみずやれはなのかみ)-淤美豆奴神(おみづぬのかみ)-天之冬衣神(あめのふゆぎぬのかみ)-大国主命(おおくにぬしのみこと)
- 大年神(おおとしのかみ)-韓神(から)-曾富理神(そふり)-白日神(しらひ)-聖神(ひじり)
 - 大香山戸臣神(おほかぐやまとみ)-御年神(みとし)
 - 奥津日子神(おきつひこ)-奥津比売命(おきつひめ)-大山咋神(おほやまくひ)
 - 庭津日神(にはつひ)-阿須波神(あすは)-波比岐神(はひき)-香山戸臣神(かぐやまとみ)
 - 羽山戸神(はやまと)-庭高津日神(にはたかつひ)-大土神(おほつち)
 - 若山咋神(わかやまくい)-若年神(わかとし)-若狭那売神(わかさなめ)
 - 弥豆麻岐神(みづまき)-夏高津日神(なつたかのひ)-秋毘売神(あきびめ)-久久年神(くくとし)-久久紀若室葛根神(くくきわかむろつなね)
- 大国主の兄弟八十神、八上比売、須勢理毘売命
- 出雲神話:稲羽の素戔・八上比売・八十神の迫害・根の国訪問
 - 出雲に関わるもので、否定されなかったものは、八岐大蛇退治のみ。
- 考古学遺物
 - 青銅武器型祭器・銅鐸の型式変化(長期間の変化)
 - 四隅突出墓の型式変化(2世代の変化では有り得ない)

日本書紀本文が否定したもの 大年神の子孫



日本書紀の信ぴょう性について

- 本文と一書(複数)の違いは、紀伝体で記述された「神代上下2巻」の本文の信ぴょう性に疑念を持たせる。
- 一書の無い、編年体で書かれた以降の28巻については、信ぴょう性が有るのか、検討してみる。
 - 個人的に検討を行った神功皇后の9巻について、記すこととする。

古事記に記された神功皇后

- 神功皇后
 - 仲哀天皇 九州香椎宮にて急死
 - 軍船を揃えて渡海
 - 新羅国へ上陸
 - 新羅の国王「天皇の御馬甘(うまかい)として、年貢を船で送る。
 - 百済は、渡りの屯倉
 - 帰国後 出産
 - 近畿に戻る(忍熊王と戦い、勝利)
- 応神天皇
 - 複数の妃 大雀命・宇遲能和紀郎子・大山守命など
 - 新羅人参来
 - 百済国王・照古王(しせうこおう)・阿知吉師を使者とし、馬2匹・横刀・大鏡献上。和邇吉師(王仁)論語・千字文を貢ぐ。
 - 大山守命の乱
 - 天之日矛到来の話(新羅国王の子)
- 仁徳天皇(大雀命)
 - 皇后の嫉妬・黒日売・八田若郎女など
 - 枯野(大型帆船)

三国史記など

- 肖古王(しょうこおう)、百済の第5代の王(在位:166年 - 214年)
- 近肖古王(346-375年)
- 千字文:500年以降に成立

日本書紀に記された神功皇后

- 仲哀9年 仲哀天皇 九州香椎宮にて急死
 - 軍船を揃えて渡海 新羅国へ上陸
 - 新羅の国王「飼部とならむ」人質として「未斯欣」を送った
 - 高麗・百済は、内官家屯倉
 - 帰国後 出産
 - 近畿に戻る(忍熊王と戦い、勝)
- 摂政元年
- 5年 「未斯欣」返還申し出 未斯欣・欺き逃亡
- 39年 明帝の景初3年6月 使いを出す
- 43年 正始4年 倭王使者を送り上献
- 46年 久氐(クテイ)など日本へ朝献の意思を、卓淳(加羅諸国)に示す
斯摩宿祢などを百済に派遣。肖古王、深く歓喜。
- 47年 久氐(クテイ)など日本へ朝献(新羅献上品強奪:取り換え朝献)
- 49年 荒田別・鹿我別を将軍とし、新羅に派遣、撃ち破る。
- 50年 51年52年 百済との交流
- 55年 肖古王死亡
- 62年 葛城襲津彦を新羅に派遣。美女2人を贈られ、新羅を撃たず、
加羅 を打つ。
- 66年 晋の秦初2年 倭の女王、晋に朝見

三国史記など

- 三国史記の年代は2年補正
- 400年 奈勿王の子、未斯欣を人質として倭に送った。
- 416年未斯欣逃れ帰還
- 景初3年=239年
- 正始4年=244年
- 肖古王(166-214年在位)
- 近肖古王(346-375年)
- 近肖古王死・375年
- 382年(百済記・逸文)
- 266年台(壺)与、晋に朝献

日本書紀に記された神功皇后 事実の評価

三国史記など

- 仲哀9年 仲哀天皇 九州香椎宮にて急死
 - 軍船を揃えて渡海 新羅国へ上陸
- 344年 – 新羅の国王「飼部とならむ」人質として「未斯欣」を送った
 - 高麗・百済は、内官家屯倉
 - 帰国後 出産
 - 近畿に戻る(忍熊王と戦い、勝)
- 摂政元年
- 5年 「未斯欣」返還申し出 未斯欣・欺き逃亡
- 39年 明帝の景初3年6月 使いを出す
- 43年 正始4年 倭王使者を送り上献
- 46年 久氐(クテイ)など日本へ朝献の意思を、卓淳(加羅諸国)に示す
斯摩宿祢などを百済に派遣。肖古王、深く歓喜。
- 47年 久氐(クテイ)など日本へ朝献(新羅献上品強奪:取り換え朝献)
- 362年 49年 荒田別・鹿我別を将軍とし、新羅に派遣、撃ち破る。
- 50年 51年52年 百済との交流
- 55年 肖古王死亡
- 62年 葛城襲津彦を新羅に派遣。美女2人を贈られ、新羅を撃たず、
加羅 を打つ。
- 66年 晋の秦初2年 倭の女王、晋に朝見

- 三国史記の年代は2年補正
- 400年 奈勿王の子、未斯欣を人質として倭に送った。
- 416年 未斯欣逃れ帰還
- 景初3年 = 239年
- 正始4年 = 244年
- 肖古王(166-214年在位)
- 近肖古王(344-373年)
- 近肖古王死・373年
- 382年(百済記・逸文)
- 266年 台(壺)与、晋に朝献

三国史記(新羅本紀) Wikipedia倭・倭人関連の朝鮮文献 2年補正

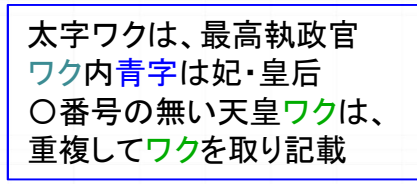
- 298年 春正月に、倭国と使者を派遣し合った。
- 310年 春三月に、倭国の国王が使臣をつかわして、息子のために求婚したので、王は阿飡の急利の娘を倭国に送った。
- 342年 倭国が使者をつかわして、婚姻を請うたが、すでに以前に女子を嫁がせたことがあるので断った。
- 343年 二月に倭王が、書を送って国交を断ってきた。
- **344年 倭兵が風島に来て、進んで金城を包囲して攻めて来た。**新羅王は自ら戦おうとしたが臣下に止められ、新羅軍は門を閉じ城から出なかった。食料が尽きた倭軍は撤退した。新羅軍は追撃の兵をだした。
- **362年 倭兵が大挙して侵入してきた。**倭人は多数をたのんで、そのまま直進して来る所を伏兵が起ってその不意を討つと、倭人は大いに敗れて逃走した。さらに追撃し全滅近くまで追い込んだ。
- **391年 倭人が来て金城を包囲し、5日も解かなかった。**倭軍が撤退を始めると、新羅軍は騎兵二百と歩兵一千で追撃し、倭軍は大敗した。
- 400年 三月に倭国と通好して、奈勿王の子、**末斯欣**を人質として倭に送った。
- 403年 倭兵が明活城を攻めるが勝てず撤退した。新羅王自ら追撃し、倭軍は敗れ三百人が戦死した。
- 405年 春三月 倭人が東辺を侵し、夏六月にまた南辺を攻め百人を捕らえて連れ去った。
- 406年 春二月、王は、倭人が対馬島に軍営を設置し、兵器・武具・資財・食糧を貯え、我が国を襲撃することを企てているとの情報を手に入れた。倭兵が出動する前に、精兵を選んで兵站を撃破しようと考えたが、舒弗郎の末斯品曰く「兵は凶器であり戦は危険な事です。ましてや大海を渡って他国を討伐し、万が一に勝つことができなければ、後で悔やんでも仕方ありません」王はこの意見に従った。
- 413年 八月、倭人と風島で戦い、勝った。
- 416年 高句麗への人質(ト好)が堤上奈麻と共に帰った。**倭国への人質(末斯欣)が逃げ帰った。**
- 429年 倭兵が、東の辺境に攻めて来て、明活城を包囲したが、功なくして退いた。
- 438年 倭人が、南の辺境に侵入し奴隷を奪い取って去った。夏六月にまた東の辺境を攻める。
- **442年 夏四月に、倭兵が金城を十日包囲して、食料が尽きて帰った。**王は兵を出して追撃しようとした。臣下は「兵法家の説に拠れば、追い詰められた賊を追っ手はならない」と言ったが王はこれを聞き入れなかった。数千の騎兵を率いて追撃して獨山の東で合戦したが倭軍に敗れ、将兵は過半数が死んだ。王は慌てふためいて馬を棄て山に登った。賊がこれを幾重にも囲んだ。突然霧が出てあたりが暗くなり、一寸先も見分けが付かなくなった。賊は「これぞ陰助だ」と言って、兵を収めて撤退した。
- **457年 夏四月に、倭人が兵船百余隻を以って東辺を襲い、進撃して月城を囲んで四方八方から矢や石を雨あられと打ち込んだ。**王城守は賊将を退け、出兵してこれは撃破し、北に追撃して海口まで行った。賊軍で溺死する者が過半数に達した。

神功皇后の記述

- 古事記については、
 - 三国史記などと直接対比する情報は少なく、不審な点は見当たらない。
 - 応神天皇の記述で、百濟国王・照古王(しせうこおう)・阿知吉師を使者とし、馬2匹・横刀・大鏡献上。和邇吉師(王仁)論語・千字文を貢ぐ。
 - 応神の時代が、近肖古王(344-373年)と推定させる。
 - 但し、千字文は西暦500年以降と判明しているため、「千字文を貢ぐ」は疑問。
- 日本書紀では、
 - 「魏志倭人伝？」と三国史記と対応できる記事が複数存在する。
 - 「未斯欣」関連は、紀元400以降の出来事
 - 魏志・晋書に関わる記事が3か所に有り、239年－266年の出来事
 - 時期的にまったく合致しない中国・朝鮮半島の記録を取り込んでいる。
 - 神功皇后の活躍時期を、仮に、下記の344年から282年付近とすると、三国史記と不都合が発生することは少ない。
 - 三韓征伐が344年
 - 葛城襲津彦の新羅派遣が382年
 - その場合でも、「未斯欣」関連記事と魏志・晋書関連記事は、虚偽となる。
 - 中国の歴史書、朝鮮半島の歴史書が日本書紀の筆者が入手していたと考ええると、
 - » 意図的な虚偽の記事を紛れ込ませ、
 - » 「年代の引き延ばし」を行ったものと言える。

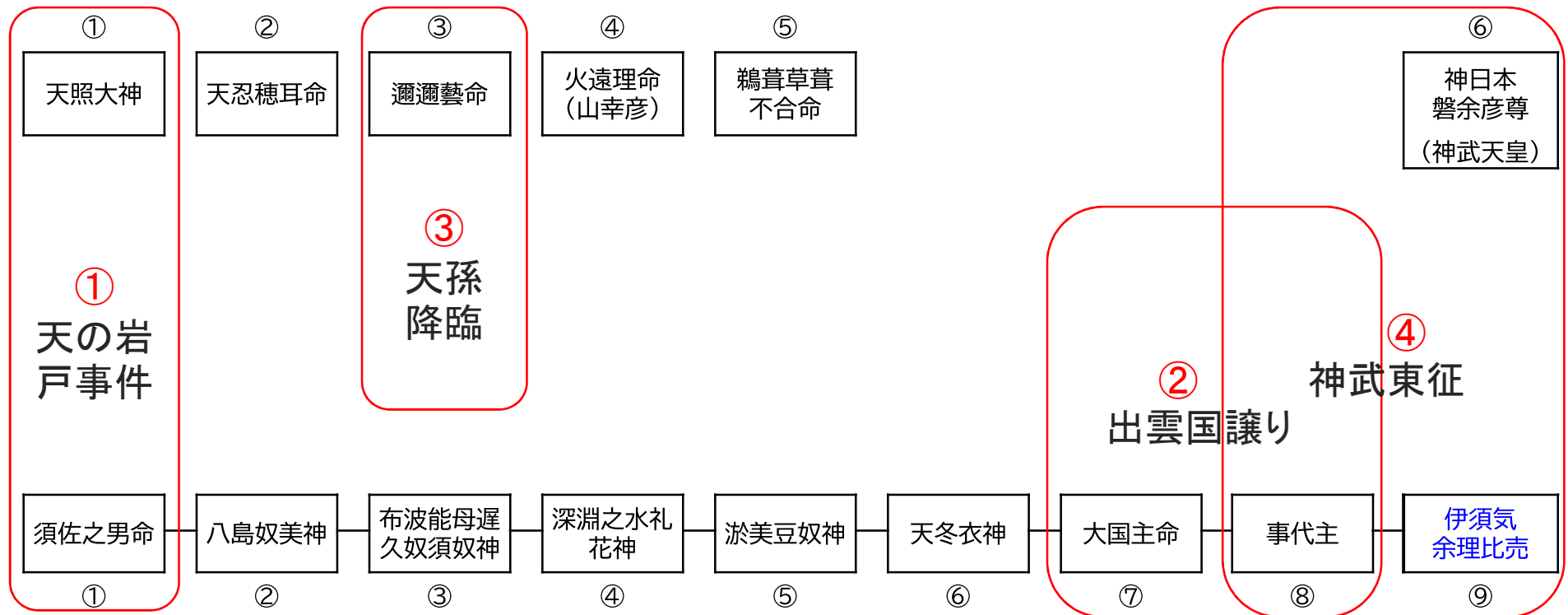
日本書紀の記述について

- Wikipedia:あらゆる史料と同じように『日本書紀』の歴史記録としての利用には厳格な史料批判を必要とする。
坂本太郎は「六国史で、歴史を研究する前に、六国史を、研究する段階が必要だと思うのである」と指摘しており、この点を象徴するものとしてしばしば引用される。
- 日本書紀は、神功皇后の記述のように、意図的に虚偽の内容を紛れ込ませている。
 - 歴史書としてみると信頼性に欠けるものと言える。
- 日本書紀の特に古い時代の記述は、十分注意して読む必要がある。
 - **それが真実か、虚偽かを見極める必要がある。**
 - 中国・朝鮮半島の歴史書と対応できるところでは、その検証と判断が可能なこともあるが、日本国内の記述では、参照できる情報が少ないので、注意が必要。
 - 一書(あるふみ)として複数の異なった記述をしている場合があるが、そこは注意が必要。
 - 一般の歴史書でも、否定できない異説を記述する例があるが、日本書紀のように、多数の異説を並べる例は少ない。
 - **多くの一書が有る本文は、疑ってみるべき記述。**
 - 異説を並べざる得ない事情があったと考えるのが妥当。
 - **本文の記述を受け入れ難いとする政治勢力が、有力だったはず。**
 - 本文によって消し去られた子孫
 - 日本書紀・本文が、古事記にある系図・人物名を消し去っているが、消し去られた子孫を検討。
 - 消し去られた子孫が、居なかったり、有力な豪族で無かった場合には、反発はなかったはず。
 - 朝廷を支える有力豪族の場合には、その反発は、大きき、握り潰し難いものが有ったはず。
 - **次頁以降に、系統図から、事実関係を見る。**



- 古事記との対比
 - 日本書紀は正史だとして、正史を信頼するとの論が有るが、「正しいか、そうでないか」の根拠にならない。正史が故に、歪む可能性も高い。
 - 正史との評価があるが、著者・成立時期を記した前文が無い。重要な系図も無い。正史ならば必ず残すはずだが、不都合があり、破棄されたものとも推測できる。
 - 中国の史書には、日本書紀が引用されておらず、日本の正史とは扱われなかった。
 - 古事記の文章には、須佐之男命から大国主命までの具体的人名の入った系図が示され、別系統の須佐之男命の系統も記されている。
 - 古事記・日本書紀の書かれた時代にも、その子孫が有力な部族として存在したと考えられる。
 - 最初に提示された日本書紀の本文で、存在を否定された人々・部族が厳しい異議申し立てをしたことは想像に難くない。天皇家に近い有力者にも多かったと考える。
 - 本文を否定する一書が並べられた原因と推察する。(反対派との妥協を図ったものとする。)
 - この件に関しては、古事記が正しい可能性が高い。
- 弥生時代の多くの遺物・遺跡から紀元前200年－300年からスタートし3世紀後半(4世紀と見る説もある)までの長い期間(凡そ500年間)が存在する。
 - 須佐之男命の子が大国主命とすると、出雲の繁栄は2世代と成る。
 - 1世代25年－30年、人の寿命が長くても80年－90年としても、2世代では100年－150年以内。
 - たった100－150年では、
 - 出雲の青銅器武器型祭器の変遷・銅鐸の変遷に合わない。
 - 神無月・神在月が定着するほど、出雲勢力を全国に広げることではできなかったはず。
 - 日本書紀の本文は、考古学の成果とは相反することになる。
- 「第8段本文：素戔鳴尊は、八岐大蛇退治の後、奇稻田姫と結婚し、大己貴命が生れた。」との本文の記述は、考古学成果との乖離もあり、虚偽の記述と見る。
 - 否定する一書が複数記述されたことは、日本書紀が成立した時代でも、正しいと認めない有力者が多数いたことを示し、本文は、虚偽である可能性が高い。
- 従って、大国主命は、須佐之男命と6代の子孫とする古事記の記述を正しいものとする。

神話の事件と登場人物

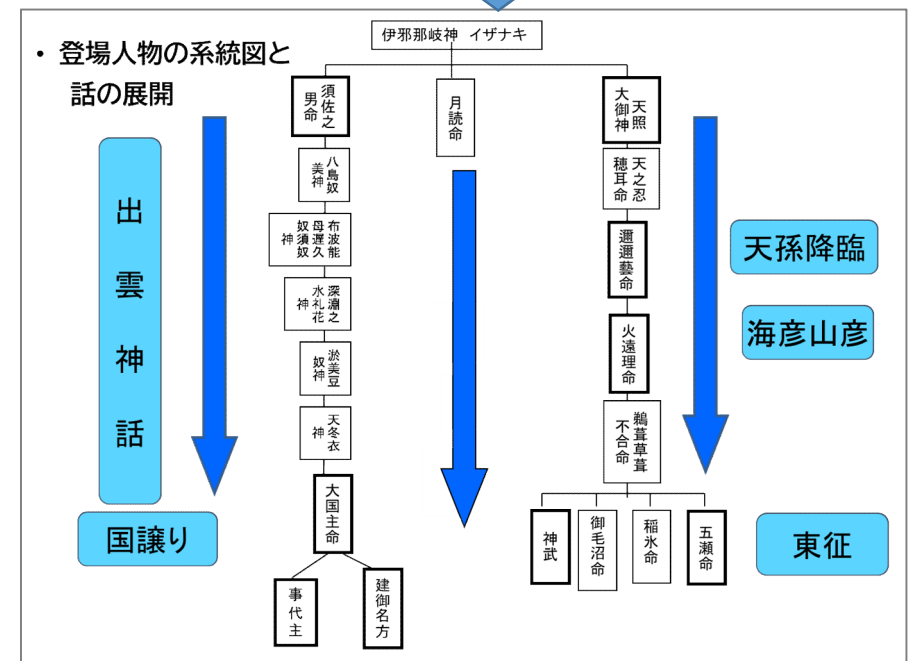
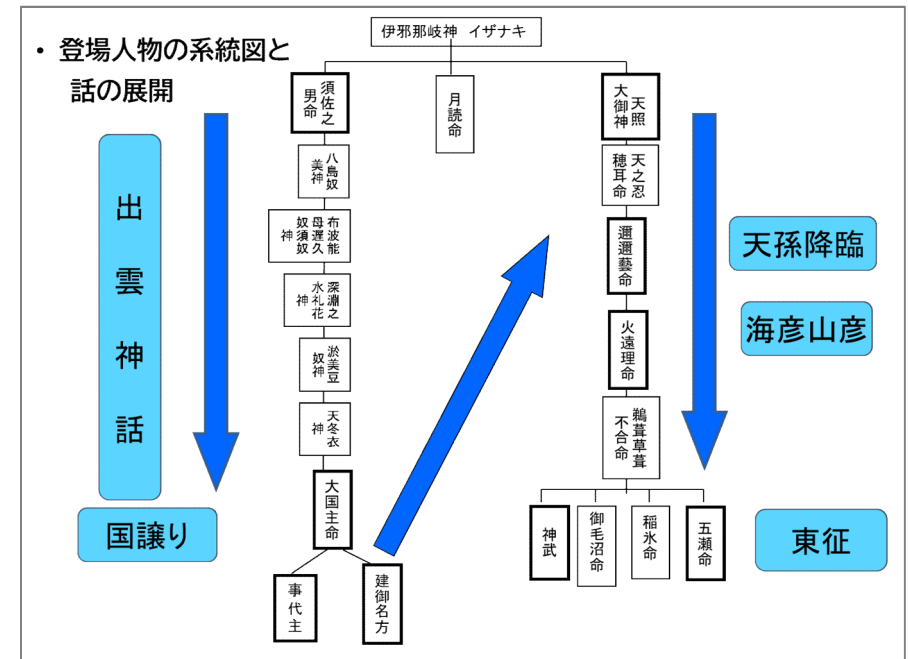


出雲神話と天孫神話の時間軸の理解

- 天照大御神と須佐之男命の争いの後、
- 天の岩戸事件が発生。
- 天照側が状況を逆転し、勝利。
- 須佐之男命を出雲の追放。
- 須佐之男命の出雲建国の神話となる。

• 天孫族・出雲族の争い激化？

- 天孫降臨(天忍穗耳命未遂)
- 天孫降臨(邇邇藝命挙行)
- 海彦山彦(天孫神話)
 - 天孫族武力強化？
 - 九州地区で戦争？
- 出雲国譲り
- 神武東征
 - 事代主一族繁栄
 - 饒速日一族(物部)繁栄



- 古事記の「登場人物」と「出雲族と天孫族の覇権争の歴史的出来事の順序」は、この表と図が正しいと見る。
 - 個々の物語が繋がり、全体として矛盾の無いストーリー展開となっている。
 - 個々の物語の発生した地域に、集落や住居の遺跡や戦争遺跡などが存在し、照合できる可能性が高い。
 - 天照大御神と須佐之男命の時代は、弥生時代開始直後では無く、ある程度の期間が経過した後と見る。
 - 記紀には、その前に、天之御中主神など別天津神(五代)と神世七代の時代がある。弥生時代前半か？
 - 天の岩戸事件から神武東征・大和朝廷開始時期が弥生時代後半で、その後古墳時代となる。
- 古代史解明に、古事記・日本書紀は役に立つか？ → 役に立つ！
 - 記紀などの文献史料を読み理解し、比較検証することにより、歴史的物語の概要が浮き上がってくる。
 - 個々の史料の史料批判と共に、複数の史料を比較することにより、更に史料の検証ができる。
 - » 検証作業の中から、背景となる現象・事象も明確化できる。
 - 浮かび上がった物語の中の「事件」の地域・内容を、考古学の成果・古地図、伝承、その他と、比較する。
 - 文献史料の出来事と考古学などの史料が一致することにより、実在が検証できる。
 - » 史料の一致は、単独の一致では、証拠として脆弱
 - 複数の内容での一致が求められる。
 - 前後の事件・事象との相互関連も傍証となる。
 - 個々の文献史料は、採用するには、史料批判が不可欠。
 - 史料批判を欠いた歴史は、独りよがりの歴史で、避けたい。
 - 疑問視されてきた神話の時代の出来事・事象の実存を語るには、「文献史料と考古学などの史料との一致」が、不可欠。

解明委員のご協力を要請します。

- 発表中では、次のように記したが、具体的な事例の追加が必要！
 - 弥生時代の多くの遺物・遺跡から紀元前200年－300年からスタートし3世紀後半(4世紀と見る説もある)までの長い期間(凡そ500年間)が存在する。
 - 須佐之男命の子が大国主命とすると、出雲の繁栄は2世代と成る。
 - 1世代25年－30年、人の寿命が長くても80年－90年としても、2世代では100年－150年以内。
 - たった100－150年では、
 - » 出雲の青銅器武器型祭器の変遷・銅鐸の変遷に合わない。
 - » 神無月・神在月が定着するほど、出雲勢力を全国に広げることではできなかったはず。
- 弥生時代の出雲地方の歴史的出来事とその時間軸を、考古学史料などにより、調べるのが有用と思います。
 - その時間軸が、素戔鳴尊－大国主命の2代の活躍年代に合致するか検討
 - 検討材料
 - » 青銅器：武器型祭祀機・銅鐸
 - » 製鉄の歴史
 - » 勾玉・管玉などの玉産業と流通機構
 - » 中核集落の興亡
 - » 墓・墳墓の分布や形式の進化
 - » 出雲族の集落の変遷と年代
 - » 出雲関連の土器の形式の変遷と年代
 - リストアップし、
 - » 年表の作成を行う
 - » 他の地方の出来事と対比し、時間軸を揃える材料を出す
 - » 絶対年代又は相対年代で年代を推定
- 該当する論文が有る。既に調査済み。調査して報告する。
 - 情報提供、報告など、ご協力いただけないでしょうか？